



かくして第2回記念日を迎えたが、そもそも記念日とは、心楽しい祝典のきっかけとなるべきもののなのに、今回の記念日は、われわれの心に、どのような喜ばしい気分も呼び起こさない。この記念日は、われわれがこれまで、どれだけ長い間俘虜であったかを思い出させる。これが、近い将来終わるだろうという希望は、まだないのだ。およそ一年半、われわれはここで強制された無為のなかで暮らした。無感動な一時期を過ぎると、危機の克服を契機に、再び創造の意欲が湧き、全てのドイツ人に生得の組織能力が完全に消失したのではないことが明らかになった。収容所の生活は、こうしてドイツの小都市の活発な動きに似ている。学校が語学、速記、簿記の授業をし、有益な講演が成人教育となり、演劇と管弦楽は芸術を代表し、機械作業所、家具工房は技能実習の場になり、体操クラブと合唱サークルは心と体の健康維持をその務めとし、口腹の楽しみのためにはさらに菓子職人、食肉加工職人が働いている。本来、新聞は公的な世論の表現であるべきだが、しかし、最初からそれを計画に入れることはできなかった。なにしろ一般的考察を引き受けるべき「公的な」生活は存在しないからである。

見ての通り、われわれの人生の使命は、一時的にせよ、いくらか先延ばしされている。われわれは全員、多かれ少なかれドイツ文化を広めようという意図に溢れて、故国を出て東洋に移ってきた。自己の意志に反して、外国に移され、故国との生産的な結びつきから切り離され、周辺に対する影響を断ち切られ、われわれはわれわれの文化を、周囲に広げるどころか、これを維持する必要があると感じている。休めば、錆びる。過去に満足し、懐手していると、全てを失い、故国の前進する文化に遅れをとる危険を冒すことになる。

われわれは、確かに当面これまでの義務から解放されているが、新しい義務は、われわれの内面的価値を少しでも失わないよう、可能な限り努力を払うよう強く要求する。こう考えると、収容所でのさまざまな組織・行事が必要不可欠なものであることが判る。それらは、実際の効用がすぐ明

らかになるとは限らないが、かなりの部分われわれの知識能力を形作るわれわれの文化を維持する作業なのである。この視角から考察すると、疑いなく、なすべき多くの課題がある。何と云っても、われわれの収容所はこの点について非常に有利な状況にある。全てが先ず展開しなければならなかったのは当然すぎることで、その後必要と経験がようやく基本方針を示すことになった。

今後収容所においてさらに前進的発展が可能であろうか？これに答える代わりに、ある人の言葉を引用したい。この言葉は、故国の状況に向けられたものだが、収容所にも当てはまる。「われわれはそれをやり遂げることができであろうか？すなわち、物質主義の支配を脱し、内奥から世界を変革しようと考え、精神の意志を現実には織り込む新しい文化創造の意欲を固めることができるであろうか？世界中の外なる敵に対抗して勝利を勝ち取るのは、内なる敵に打ち勝つより容易である。精神の観念はわれわれの日常的な考えと強く織り合わさり、習慣の粘り強い力と結びついている。」詩人と思想家の国の民もますます、物事の価値を金銭的価値をもって量りはじめた。われわれの文化は、理想を掲げた詩人や思想家が伝えてくれたものである。われわれの文化は理想によってのみ、一層発展できる。だから、収容所内でも理想のみが実り豊かな文化事業を成し遂げることができる。理想は死に絶えたかに見えるが、それらはまどろんでいるだけで、呼び起こされるのを待っているのだと私は思う。人生を一つの理想、祖国の名誉に賭けることが出来た人は、一つの理想のために働くことができる人である。避けがたい、ありとあらゆる不快なことが、多くの人びとのエネルギーを奪いはするが、祖国の繁栄という大きな目標が認識された今、それらがいかに小さく、意味のないものに思われることであろうか！

この論説は、ここでの生活をより高い価値から展望出来ない人にとって、余りにも誇張され、「理想主義的」なものに聞こえるかもしれない。確かに、今の瞬間は、われわれに何の要求もしないように見える。われわれが、再び自由になって、俘虜時代の生活を回顧する時になってはじめて、われわ

れはこの生活を別の観点から考察することになるだろう。その時われわれは、次のように言うことができるに違いない。「私は、この時期を失われた時間にしないよう、私の分を果たした」、と。

イギリスの参戦理由と戦争準備（2）

かくして、新しい手段がまた講じられねばならなかった。イギリス国民の指導者たちを支配する精神の特徴は、彼らにとって、戦争がいちばん分かりやすい、おそらくいちばん簡単な手段のように思われたことである。むろんそれは、昔から定評のあるイギリス流の戦争で、他の諸国民は大ブリテンのために火中の栗を拾うべく選びだされるのだった。

まさにこの点において、情勢はイギリスの紳士たちにとって、非常に有利であった。というのは、彼らにとって、国王エドワード7世はおあつらえ向きのビジネスマンだったからである。彼は、協力者として選んだヨーロッパ列強に出かけ、類い稀な賢さと巧みさで自分たちの利害を代弁した。皇太子時代の、放埒で浪費好きな行状が、早くから彼をイギリス財界の大物たちと親交を結ばせたが、国王はこれらの人びとのなかから友人を選んだ。そのうちの何人かは、フランクフルト・アム・マインのユダヤ人横町出身である。友人で後援者たる国王は、やがて国王の名と地位をもって彼らを支援する行動的で有能な擁護者となった。

一般的にイギリスの憲法は、国王には極めて僅かな政治的活動の可能性しか与えていない。今エドワード7世が、時流の経過にこれほど大きな影響を持ったのは、偏に彼の個人的な資質に帰せられるべきである。もし彼がたまたま、イギリス国王、インド皇帝の王位継承者に生れなかったなら、この資質は、彼を相当厚顔ではあるが優秀な実業家にしたことだろう。かくして彼は、イギリスの「一万人の上流階級」の心情にぴったり適う国王となり、今、世界を恐怖で満たしている恐るべき流血に、少なからぬ責任を負う男となった。彼は自分に好意的な運命によって、自分がまいた種の

血ぬられた収穫を見ることはなかった。

しかし、彼が主張する目的にとって、彼の死は早過ぎはしなかった。彼は自らの務めを果たした。全ての国は彼の狡猾な誘惑に負けた。フランスで微かにくすぶっていた復讐の思いを、彼は再び炎々と燃えさかる焰に煽り立てた。ロシアは、東方で日本軍によって惨憺たる敗北を喫した後、西方に向かってバルカンをめざした大スラブ主義運動が正しかったということを彼に納得させられた。イタリアとセルビアに対し、彼はオーストリア・ハンガリーを犠牲とする領土拡大を約束した。最後にベルギーに対し、ドイツの領土欲がこの小国への攻撃に転じるならば、すぐに援軍を送るであろうと言い、無私の友人であるように装った。

全ての国が彼の網にかかり、彼の依頼人はその成功におそらく満足することができたろう。

彼の依頼人もその間、怠惰ではなかった。彼らは、イギリス国民を戦争に向けた気分にする課題をになった。

一般的に、国民の意志はイギリスにおける上述のような統治状況にあって、さしたる重要性を持たない。大衆は議会選挙の際に、彼らの意志を表明する。ところで議員は、おそらく労働党議員を除いては、われわれが見て来たように、上流階級の出身であるから、政府が交替しても統治システムはほとんど全然変わらない。政権を執るのが、保守党であれ、自由党であれ、「彼らは皆同じ船に乗っている」のである。

しかし国民の意志を抜きにして、それどころか、もしかすると国民の意志に反して、大戦争を引き起こすのはやはり冒険であった。たしかに、陸海軍に顧慮する必要はなかった。兵士や水兵は、英国においては最も低い階層から徴募されるからである。最も低い階層の人びとが、自分たちの息子が砲火の餌食になることを了承しようとしまいと、かなりどうでも良いことであった。彼らは、国家に自分を売り渡さなくてもよかったのだから、というわけである。

つづく

収容所展望

もしカーニバルの舞踏会がなかったら、カーニバルがあるのか、それともあったのか、私はすっかり忘れてしまったことであろう。甘美なメロディーで音楽が盛り沢山に演奏されて、全ての人びとを舞踏場へ引き寄せた。衣装あるいは仮面着用の義務はなかったが、若干の個性的な衣装がテルプシコレ〔合唱・舞踏の女神〕の信者たちの間に見受けられた。全てが堂々と進行していたので、威厳のある牧師様までがちょっとしたダンスを踊り、最後まで頑張っていた。近眼の英国人が、望遠鏡の代わりに手に入れた2本のビール瓶を通して、無邪気な賑わいを意地悪そうに眺めていた。

養鶏が最近どんどん盛んになっている。ピヨピヨ鳴くひよこの群れが、予想に反して大いに繁殖している。そればかりか、人工ふ化器が、さらに多くの雛を生み出すことになるそうである。威風堂々たる鷹が小さなハイタカの鳥籠に引っ越してきた。ハイタカのほうは、ひよこたちの上にある、無数にある鳥部屋のひとつに押し込まれた。哀れなハイタカは、タンタロスの苦しみに耐えなければならない。薄い板だけで隔てられたご馳走を思う度に、彼の口中に唾が湧くのだ。彼はきっと、小さいひよこ連中に長生きしてくれとは願っていないだろう。

収容所内の建築活動は全般に極めて活発で、一戸建て住宅建築運動が次第に広がっている。バラックの裏や横手に豪華な特別室が誕生し、幸運にも家を持つことができた人は、騒々しい本館よりもずっと静かな生活をそこで楽しむことができる。ソーセージ工場の増築が必要になった。美味なる製品の売れ行きが盛んな証拠である。監督将校の部屋の隣の隅に、様々な建物が建てられている。それらは、明らかに居住と営業の目的に役立つことになるようだ。

徳島の殿様がもとの領地を訪問された。彼に敬意を表して、色々な祝典が公園のなかの御殿で催された。木曜日の朝、彼は満艦飾の京都丸で、ある島に立ち寄られた。

木曜日の晩に、奉天会戦（1905 年 3 月 1 ～ 10 日）を記念して、眉山の記念碑に向かって、松明行列が行われた。果てしない光の列が、音もなく黒々した山腹を蛇行しながら登ってゆき、それから大急ぎで騒がしく降りて来た。

われわれの新聞の記念日（第 50 号）を、私は沈黙をもって無視したい。さもなければ、後まだいつまで続くのかとの疑問が再び鮮明になるからである。一番良いのは、かなりの長期間を覚悟することである。早く終わった場合、期待外れがその分、快適になるからである。ドイツ軍は、今まさに事態に早急な決着をつけようとしている。

3 週間以上もヴェルダンをめぐる戦いが鮮烈を極め、あちこちで輝かしい成果が得られた。これは、最終目標が達成されるまで、ゆっくりとではあるが、留まることのない前進であると、ほぼ信じてよからう。

第 33 回演奏会

合唱サークル「ゲルマニア」の協演

- | | |
|-----------------------|------------|
| 1. 歌劇『白衣の婦人』序曲 | ボワエルデュー |
| 2. 歌曲 a) 『捧げる歌』 | モーツァルト |
| b) 『オーストリア騎兵の歌』 | 歌唱デムラー海軍大尉 |
| c) 『カウプのエルスライン』 | フィルケ |
| 3. 『ウイーンの森の物語』 | J. シュトラウス |
| 4. 『観客の中から、観客と共に』メドレー | O. フェトラス |
| 5. 『モルトケの思い出』行進曲 | リューデケ |
-

チェス・コーナー

(駒の略語 K = キング、D = クイーン、L = ビショップ、
S = ナイト、T = ルーク、B = ポーン)

第 93 問の解答

1. Th8 - h5 任意の手
2. D か S で詰み

第 94 問の解答

1. Ld3 - f5. Kf6 - e5.
2. Lh4 x g5 任意の手
3. Dc2 - c5 詰み

第 94 問、その他の解答

1. e7 - e6 1. e7 - e5
2. Dc2 - c2 e6 x f5(e5) 2. Dc2 - c8. Kf6 - e7
(e5 - e4)
3. Dc5 - d6 (f8) 詰み 3. Dc8 - f8 (e6) 詰み

正解を送ってくれたのは、ヨーゼフ・ヴェーバーである。

第 95 問

白 : Kb8, Dh2, Tb4, c3, Lb1, f6, Sb6, e5, Be4, f2, f5

黒 : Kc5, La5, Sa8, c4, Ba6, b5, c6, c7

2 手詰め

第 96 問

白 : Ka4, Df1, Le5, Sf3, Bb6, c2, g3, g6

黒 : Kd5, Bb7, d6

3 手詰め

あるフランス人の日記（2）

われわれの力の全てが、われわれの財産の全てが危険にさらされている。運が良ければ、われわれの国土は自由になり、さもなければパリは失われる。われわれはそのことを理解して、勝利を収めるだろう。フランス万歳、われわれに勝利あらんことを！ 9月28日。24日以降文章を書いていないのは、われわれが攻撃によって呆然となってしまったからである。僕の大隊（？）は1,300人の兵員を失った。その中に12人の士官が含まれる。士官は僕たち3人だけがかろうじて残っている。敵の反攻が危惧される。われわれは極めてまずい立場にある。準備していた出撃は完全に失敗した。もう終わりだ。全てが好調な右翼で、不首尾を償おうと試みられた。（捕虜2万、砲70門）。最初の攻撃が、目標を達成できず、われわれにとって、恐ろしく高い代価を支払ったことに変わりはない。第103、104連隊は、前進を拒否した。僕の中隊は210人中まだ30人が残っている。他の連隊も似たような状況である。

僕は死ぬほど疲れている。砲撃のためわれわれの思考力は奪われた。恐ろしいことだ。われわれは、立っていられないぐらいだ。だがやらねばならない。

ドイツ軍は立派だ。僕は、敵の勇敢さ、見事な規律、細事に至るまでも秩序を維持しようとする心構えに感服し、敵を尊敬する。ドイツは非常に強力だ、自らをそのように育て上げてきたのだ。見事だ。詳細は書けない、禁止されている。

つづく





すでに 50 週が過ぎた、
あなたがこの世に生まれてから。
僕は考えもしなかった、これまで
これほど長続きすることになろうとは。
時が過ぎ去った、いくつもの週がもう
過ぎ去ったと思ったら、25 週目だった
そして、われわれの読者の誰もが
そのことを、とてもいぶかしく思った。
というのは、それまで飛ぶように
日数が過ぎ去っていたのだから
そして、誰もが密かに思った、
おじさん、もう帰ってくるなよ。
哀れな人間にできるのは思うだけ、
運命の行き先はまた別なのだ。

今、あなたはまたこちらに向かってくる。
もう、老いさらばえて。
苦しみや悩みがあなたを圧することはない。
それはあなたには瑣末なことだ。
また、さらに多くの週がやって来ても
われわれがここに留まらねばならない
あなたは繰り返しやって来て
われわれの傍に留まるだろう。
新聞はすでに積み重なって
高い、大きな山になっている
第2巻は幸せなことに完結した。
新聞はほとんど持ち運ぶことも出来ない。
その新聞をながめやり、
心の中でこう考えている人がいるほどだ。
最終的にこれをどこへ持って行こうかと。
あまり嬉しくないことだ。
だが読者の皆さん、我慢を
時がさらに過ぎ去り
戦争という大波も過ぎ去り
その後平和が再びやって来る。
そして君たちはこの新聞を抱え
君たちの故郷へと帰還する
おじさんは、君たちの道中の無事を祈り、
永久の眠りにつくことになる。



長い年月が経過した後にはじめて、
ページが黄色く変色したころ、
君たちは再びこの新聞を見つめる
そして、夜の訪れとともに遠くから
遙か遠くから君たちのところへと
思い出が再び帰って来る。
真剣な日々から、困難な時代が。
君たちの耳に響くのは歌声
過去からおぼろげな像が現われる
それは T.A. のおじさんとその面々である。
そして、過ぎ去りしものが再び立ち現われ
挨拶が君たちのもとへ響いてくる。
T.A. のおじさんの挨拶だ。
さらば、君たちドイツの同胞よ！

(T.A = 『トクシマ・アンツアイガー』)

